

資本論における方法と世界観（中・その三）

——その残された諸問題の一つについて——

梯 明 秀

内 容

まえがき

一 方法ということ

二 世界観ということ

三 近代経験科学の体系化

四 近代科学としての経済学における体系化

五 賃労働者の実存形態——（以上、第十八巻第一号）

六 マルクス主義の成立——（第十八巻第四号）

七 会見以前のマルクスとエンゲルス（第十八巻第五・

六号）

資本論における方法と世界観（中・その三）（梯

八 徹底したヒューマンイズムの精神（本号）

九 マルクス主義の発展（以下次号）

八 徹底したヒューマンイズムの精神

さきに（日本誌の前号に掲載した部分、すなわち本稿の第六節で）申しておきましたところの、マルクスとエンゲルスのあいだで四四年の八月に行われた記念すべき会見を、間近かに控えていた頃の、この二人のことについて、続けて話してゆくことにするわけですが、そのまえに、ただいま（日本誌の第七節の最後のところで）申しかけて、途中で打ち切っておいたこと

五七（五七）

について、すなわち、四四年の八月に一応は書き終えたことになって、一連の草稿の全体が、今世紀の三二年になって、ようやく公表されるにいたったということ、その後の経緯のことについてのことに、すこし、お話ししておきたいと存じます。ただいま申しましたように、この四四年の一連の草稿の全体は、アドラツキーの編集した『マルクス・エンゲルス全集』の第一部の第三巻のなかで、まとめられて収録されているのであります。しかも、その見出しの標題も「四四年の経済学および哲学に関する草稿」(Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844)となっているのであります。このアドラツキー編集の『マル・エン全集』は、その原語であるドイツ語の Marx Engels Gesamtausgabe の、それぞれの頭文字を取りだして、MEGA = 「メガ」と一般に呼ばれていることについては、皆さんも、おそらく、ご承知のことと存じます。この「メガ」の第二部には『資本論』に関係したノートが収められ、そして、その第三部は、書簡集となっております。第一部には、それ以外のマルクスおよびエンゲルスの殆ど全部の諸文献を、遺稿のとおり収録して、そして、だいたいにおいて、執筆の年代

順に配置されております。この点は、いまでも高く評価すべきことだ、とせねばならないのであります。この評価のことについては、あとで申しあげることになりますが、とにかく、このアドラツキー編集の『マル・エン全集』が、モスクワで刊行されたことよって、この『全集』は、この時から、各国において、順次に訳出されて出版されていく、ということになります。

ところで、日本では、どうかと申しますと、その三二年と同じ年の昭和七年に、早速、改造社から『マルクス・エンゲルス全集』として翻訳されたのであります。このことは、準戦時体制下に向いつつあった当時の政治状況を思い浮べて見るとき、一つの驚異に値いすることではなかつたかというように、ぼくとしては、いまから回顧してみても、そのように追想させられるのであります。ただ残念なことには、ここでの「経済学および哲学に関する草稿」は、アドラツキーの編集のとおり、一つに纏められては訳出されていないのであって、二つの論文のように分けられて翻訳されているのであります。すなわち、その第二十六巻に「ヘーゲル弁証法および哲学一般の批判、四四年」が、そして、その第二十七巻

に「経済学に関する手稿、四四年」が、それぞれ別々に収録されているのであって、あたかも、それらの哲学的な手稿と経済学的手稿とが、それぞれ独立のものであるかのような印象を与えられることになっております。それにしても、この

二十七巻に収録してあるところの、いま申しました「経済学に関する手稿、四四年」という見出しの標題の次には、はっきりと「経済学および哲学に関する手稿」序文、四四年」という見出しが並べられてあって、ここでは、アドラツキー編集のままの標題は、たしかに生かされております。そのかぎりでは、改造社版の『マル・エン全集』で別冊に収録されているにしても、ぼくたちは、これらの哲学的な手稿と経済学的な手稿とを、並べて読んでいって、それらの理論内容を理解してゆくかぎりでは、ぼくが、いま言ったような印象も消えるわけでありませう。このようなことを、ぼくが、この今日の講義で、とくに問題にするのは、いったい、どういう意味をもつのか、というように皆さんは、お聞きになっておられると存じますが、要するに、ぼくとしては、これらの二つに分けられたところの手稿は、すなわち、その哲学的な手稿と、その経済学的手稿との、これらの二つの手稿は、それらの

理論的内容において、とくに、それらの思想的意味においては、切っても切れない関連にあるのだ、ということを主張しておきたいからなのであります。

このことについても、これから、お話しをしてゆくことになりませんが、しかし戦前の昭和の時代には、ぼくとしても、このような問題意識はなかったようであります。いや、なかつた、というのが事実であつたと、いまから回想されます。すなわち、当時、ぼくとしては、すでに唯物論の立場に立つて執筆活動が続けてきた頃なので、この改造社版の『マル・エン全集』の全巻を買い揃えてゆきました。そして、いま問題にしている四四年の「経済学および哲学」についての手稿にたいしても、まず第一に、その第二十七巻に収録されている「経済学に関する手稿」を読んで、そして、それを台本にして、「人間労働の資本主義的自己疎外」という論文を昭和十年二月に書いて、当時、発刊されていた『社会』という薄っぺらな雑誌に投稿して、その三月号に発表することも出来たのであります。そして、これとは別に、昭和十一年に日本評論社から刊行された『現代哲学辞典』には、同じく改造社版の第二十六巻に収録されていた「ヘーゲル弁証法および哲

学に関する手稿」を種本にして、その「弁証法」という項目のための一文を、同じく昭和十年の七月に執筆していたというわけであります。いいかえますと、マルクスのこの手稿におけるヘーゲル弁証法の批判という思想内容と、同じ手稿における「疎外された労働」という概念規定の経済学的意味とを相互に関連せしめて理解する能力は、まだ、ぼくには、なかったということを示しておるわけであります。そして、戦後になっても、ぼくが、『資本論』を再び研究するようになって、とくに、その学問的体系性という点に焦点を、しばらく研究するようになって、この学問としての体系性が、マルクスにおいて、どの時期に打ち出されることになっているかということ、マルクスの諸労作を年代的に遡っていったとき、その時に始めて、この『経・哲手稿』のなかに、その体系化しようとする構想の萌芽が、すでに打ち出されていた、ということを見出して、そして、この『手稿』の全体を詳細に分析的に研究することになりました。これが、ぼくの『経済哲学原理』という著書になっていくわけであります。

このような、ぼく自身の研究上のいきさつもあって、ぼくは、この四四年の『手稿』を、とくに重要視しているのです

が、そのばあいと同時に、ぼくは、マルクス自身の思想的成長という面から見ても、この『手稿』において、マルクスは始めてマルクス主義者に成りえたのだ、というように考えていたし、また、現在でも、そのように考え続けているわけであります。そのように考える理由としては、まえにも申しましたように、この『手稿』において、レーニンのいうところの、マルクス主義の成立に不可欠な三つの思想的源泉が、はじめて総合されて論理的に統一されておる、という解釈が、ぼくの特論となつていからであります。しかし、ぼく自身の持論としての、このような解釈は、誤解を招いている点もあるのです、この講義で、ついでに、予想される色々な誤解を予防するいみで、もう少し、お話しを、続けてゆきたいと存じます。

この『手稿』を構成する一連の断片は、「第一ノート」、「第二ノート」、「第三ノート」というように分類されるように、現在では編集されておりますが、その論述の内容から見ると、その「第一ノート」は、もっとも体系的に展開されていて、ぼくが今しがた申しましたところの、後年の『資本論』の学問的体系の萌芽形態を、ここに見ることができると

でないかと考えているものなのです。そのなかの「疎外された労働」という見出しを付けられてある断片こそは、もっとも長い手稿であつて、しかも、マルクス自身によつて体系的に叙述しようとするその意図が、明瞭に読みとれるものとなつております。それだけでなく、この断片においてマルクスの展開しているマルクスの独創的な思想こそは、四四年に執筆されたこれらの一連の断片的な手稿の全体を、マルクス主義として始めて性格づけることのできるころの、最も重要な内容になつてゐるものであります。すなわち、この体系的断片においては、皆さんもご承知のところですが、私有財産制度そのものを、たんに資本制的な私的の所有だけでなく、奴隸制社会、封建性社会の私的の所有に適用できるところの、私有財産制度一般を、その批判的分析の対象として、とりあげております。そして、人類社会の歴史的過程において、この私有財産制度なるものが、何を原因として発生してきたのか、一般に私有財産制度なるものを成立せしめるところの、その本質は何であるか、ということを分析して、その原因なり本質なりを、その見出しの標題の示しているとおりの「疎外された労働」である、と規定してゐるのである

資本論における方法と世界観(中・その三)(梯)

わけですが、このことも皆さんの十分に知つてゐるところであります。

ところで、この「疎外された労働」という思想は、ヘーゲルの『精神現象学』の「自己意識」の章のなかで展開されてゐる「主人と奴隸との関連」という箇所までの弁証法的な叙述を、唯物論的に捕えなおしたところから出てくる思想なのであります。そして、ヘーゲルにおいても、この「主人と奴隸との関連」についての弁証法において、自立的な主人に仕える非自立的な奴隸が、物に労力を加えることによつて、すなわち、労働することによつて、かえつて自立的な自己意識を持つことができ、したがつて、主人の自立的自己意識が非自立的なものに転化する、いいかえれば、階級的な支配服従の關係が逆転せざるをえない、という可能性のあることを、そのような弁証法的論理を、思弁的に展開してゐるのであります。この逆転の可能性にある弁証法は、とくに資本制社会の階級關係においては、たんなる可能性にあるものではなくて、まさに現実性にあるものである、というように直観し、そして、そのように漠然と理解してきていたところの、若きマルクスにたいして、強固な論理的基礎づけを与え、マルク

ス自身の独自の思索にたいして、おおいに自信を与えたはずだと、ぼくたちが注目しなければならぬことには、問題のないことだと存じます。このようにして、ヘーゲルの『精神現象学』の「自己意識」の章で展開されているところの、自己疎外の論理は、そのままではないにしても、マルクスによって継承されるほかなかった、というわけであります。しかし、それまでの若きマルクスは、前年の四三年の「ヘーゲル哲学批判、序説」において、いまだヒューマンイズムの立場にたっていたにとどまっているにしても、社会革命の主体はプロレタリアートでなければならぬ、という信念を固めていたのであります。しかも、そのまえの「ユダヤ人問題について」のときから、国民大衆の窮乏化なり、それに抛る差別関係は、従来の封建的な、また、これから出てくる資本制的な、それぞれの私有財産制度を、原因とした、その結果でなければならぬ、という認識を深めつつあったし、そこへ、エンゲルスの『国民経済批判大綱』を一読して、おおいに刺戟されたわけであったわけであります。そして、イギリス、フランスの古典経済学の主要な著書を、精力的に研究することになったし、その研究の成果として『経済学・哲学手稿』と

しての一連の手稿断片が、マルクスによって執筆されたのであります。

こうした径緯から考えて見ると、その「第一ノート」の「疎外された労働」なる体系的な断片の執筆は、たんに私有財産制度一般を批判的研究の対象としたものでなくて、とくに資本制社会における私有財産制度を、問題の焦点にしほろうとした意図のもとに出来あがったものと解釈するのが、妥当な解釈であるというべきであります。そのかぎりでは、この「疎外された労働」なる手稿断片には、古典経済学の研究をつうじての、近代的賃労働者階級の資本主義の発展のもとにおける窮乏化についての現状が、十分に認識されていることが、前提となっておるわけです。また、そのかぎりでは、ヘーゲルの「主人と奴隷との関連」という弁証法も、そのまま継承されたものではなくて、そこにおける支配服従の関係が逆転されうるといふ論理も、これが単なる可能性としてのものから現実性のあるものとして、そのまま継承されたものでなくて、資本主義の発展したイギリスの労働者階級の現代認識のなかに、当てはまるように批判的に継承されたはずだ、というように、ぼくたちは理解せねばなりません。いいかえ

ますと、ヒューマニストとしての立場を徹底せしめることからして、プロレタリアートにのみ社会革命の主体を求めていた、という理論水準になったところのマルクスは、エンゲルスの影響のもとに、近代資本主義の発展過程ということと、この過程において必然的に発生する賃労働者階級の窮乏化という二つの側面であることを、同一過程の相い表裏している二つの側面であるという事実認識を持っていたわけであって、そして、この認識された経済的事実について、いまだ非自立的な自己意識しか持ちえないでいる賃労働者も、やがて、自立的な自己意識をもって階級的に自覚しうるはずだ、というようなヘーゲルの「奴隷」による転換の論理を、適用したことになります。しかも、このような現実の階級関係への具体化的な適用によって、ヘーゲルの「主人と奴隷との関連」における、その転換の論理を唯物論化した、ということになります。要するに、古典経済学の批判的継承と、ヘーゲル弁証法の批判的継承とが、同時に成就されているのが、この「疎外された労働」という断片的な手稿なのであります。

このようにして、この「疎外された労働」という断片だけにおいても、マルクス主義が成り立つために必要な二つの思

資本論における方法と世界観（中・その三）（梯）

想的源泉が、すでに同時にアウフ・ヘーベンされている、いいかえますと、マルクス主義という思想的立場の、その理論面が、すでに構成されている、といっても差し支えはないのであります。それでは、も一つの思想的源泉としての社会主義の立場は、どのようにして、この時期のマルクスの頭の中で確立されることになっているか。この問題の解明に入っていくためには、この時期までに、フランスのサン・シモン、フリーエヤ、イギリスのオーエンの空想的社会主義を、どのように批判的に克服していたのか、さらにフランスの社会主義をこの時期に、すでに、バブーフまで遡って研究していたのか、その他、等々というような思想的系譜を、調べる必要があります。しかし、ほくとしては、この思想的系譜を明確にするための研究は、残念ながら、現在までに、まだ、やっておりません。それにしても、この『経・哲手稿』のなかの「第二ノート」としての「私有財産の関係」という断片とか、「第三ノート」の「私有財産と労働」および「私有財産と共産主義」とかの断片では、サン・シモンなりフリーエヤも説かれていた労働疎外論にも触れて、それぞれの欠陥を指摘していることは事実であります。それだけでなく、当時に

六三（六三）

強い影響力のあったブルードンや、また当時までの未熟な共產主義の諸思想をも、批判した叙述が展開されているのであります。これらの批判の対象になっている社会主義者たちは、いずれも、私有財産制度が労働者階級を疎外状態に置いた原因になっている、という事実認識については、すべて共通しているのですが、この事実認識が現象的であったり一面的であったり、要するに、その本質にまで論理的に掘り下げていない、すなわち、概念的に把握するということができていないために、労働者の疎外の状態にたいする解決策として打ち出されるところの、それらの社会主義なるものは、いずれも、真実の人間解放になっていない、というのが、これらの断片におけるマルクスの批判的な思想内容となっているのであります。ブルードンの『貧困の哲学』という著述にたいしては、三年後の四七年に『哲学の貧困』という逆説的な標題の一冊の本で、マルクスは再び、しかも全面的に批判するわけですが、いまだ、経済学プロバターの知識の不十分であった四四年の時期においては、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』に啓発されたばかりの頃としては、当時のマルクスはブルードンからも経済学プロバターの知識を学ぶところがあつ

た、とも推定されるのであります。

たとえば、マルクスも、その影響を受けたとされているところのブルードンの『財産とは何か』という著述において主張されている思想が、どんなものであったかと申しますと、要するに、一般に財産とは他人の労働の成果を盗んだところに成立している、だから、この私的所有としての財産を、万人のために平等に還元しなければならぬし、そうした平等な所有権を万人に保証するような自由な社会を、作り出してゆくための経済政策を打ち出している、というだけのこと、後になって、サンジカリズムや無政府主義として、継承されてゆく思想なのであります。このブルードンの社会主義の前提になっているところの、私有財産なるものが労働者の労働の成果を横領することによって成立している、という思想は、マルクスが後になって、資本なるものが労働者の労働過程における搾取において成立する、という経済的機構を明確なものにすることになる、その思想と共通する点があり、この点で、四四年までのマルクスは、ブルードンの影響を受けていたというように、ほくたちは考えても間違はないのでないかと存じます。しかし、マルクスのばあいは、生産過程の科学

的分析をやったうえで、そこに搾取という事実の経済的必然性を認識しているのであって、この資本家に領有されてしまう剰余労働といった経済学的範疇を、いまだ打ち立てるところまでに、経済学の研究を進めていなかった四十年代にあっても、マルクスは、この搾取なり横領なりを、ブルードンとは違って解釈してははずだ、ということも確かに言えることなのであります。と申しますのは、四四年の『経済学・哲学手稿』における「疎外された労働」についての論述そのものにおいて、私有財産制度にたいする批判の仕方が、ブルードンとは全く異質のものであることを、示していることが明瞭であるからなのであります。この「疎外された労働」という体系的な断片で、マルクスの分析したものは、労働一般の疎外されているという状態が、私有財産の成立するための唯一の原因であり、疎外されている労働の集積が、そのまま他人の私有財産となっている、ということなのであります。いかえると、私有財産ということと疎外された労働ということとは、同一の事実であって、この同一の経済的事実の、その表面というか全体としての姿が私有財産であって、その裏面に本質として隠されているものとして、個々の労働者の疎

外状態がある、というように、要するに、現象と本質との論理関係にあるものとして、マルクスは分析しているのであります。このようなマルクスの分析は、まだ科学的な分析とは言えず、なおヘーゲル的な思弁的分析にとどまっておりますが、それにしても、このような鋭い思弁力によって、労働者の疎外されている事実が、私有財産制度の結集である、というような現象的な側面の認識にとどまっていたところの、当時のいろいろな社会主義の立場で説かれていた労働疎外論を、すべて斥けることができているのであります。このような現象的把握における因果関係を逆転せしめて、私有財産制度を結果として生み出す唯一の本質的原因として、論理的に打ち出されたところの「疎外された労働」という概念からして、当然のことではありますが、私有財産制度を否定的に消滅せしめるためには、個々の労働者が、その疎外状態から、自ら主体的に、本来の普遍的人間性を回復せねばならない、という実践のための原理を、理論的に展開することになっているわけであって、そのかぎりでは、プチ・ブルジョワの立場を代弁したにとどまったブルードンの一種の空想的な社会主義とは、まったく異質の社会主義の立場を、マルクスは自分自身

だけで、創意していた、というように解決せねばならないのであります。

しかし、この『経・哲手稿』で主張されているマルクス自身の社会主義は、依然として人間主義であります。しかし、現実的な色々な制約下にある人間を、普遍の人間にまで解放せねばならないとするこのヒューマンイズムは、ただ、労働者たちが各自の疎外状態を自覚して、これをアウフ・ヘーベンすることによってのみ、可能だ、というように具体化された形で、徹底したヒューマンイズムに前進せしめられているわけでありませう。それと同時に、もう一つのことを、ここで重要なこととして、ぼくたちは注意しておく必要があると存じます。それは、こういうことであります。この徹底されたヒューマンイズムの精神に貫かれているマルクスのこの社会主義の立場なるものは、その実践課題が現実解決されてゆくためには、要するに、個々の賃労働者が全体として、その色々な疎外状態から自己回復して、そして、普遍の人間として自己解放してゆくことが、現実に来るためには、この実践的な目的意識的な活動なり運動なりが、資本制度社会の経済的発展そのものにおいて、因果必然的なこととして、対象的に裏

づけられていなければならない、ということであり、この歴史的過程の客観的な論理について、マルクスは、この当時に、どの程度まで認識していたか、ということでありませう。このことについては、エンゲルスの「国民経済学批判大綱」を感懐して読んでいたかぎりでは、当時のマルクスも十分に心得ていたものと、ぼくたちは推察しておかねばならないことなのであります。いいかえますと、資本主義の発展そのものが、必然的に労働者階級の人間解放を保証しているという、歴史的現実の客体的論理としての弁証法は、マルクスは、エンゲルスと共有していた、ということでありませう。しかも、そのうえで、労働者自身の主体的自覚においてのみ、その疎外状態からの自己解放が、はじめて成就しうる、そして、この自己解放への運動によって、歴史的現実を前進せしめてゆくことになる、という主体的自覚の弁証法を、とくに積極的に打ち出していったものが「疎外された労働」なる断片の理論内容となつていたのであります。このように、ヘーゲルの弁証法を、その具体性において、いいかえると、客体的過程の論理であると同時に主体的自覚の論理でもあるという具体性において、批判的に継承していることによって、しかも、この

批判的に継承した弁証法をば、資本主義社会の階級関係にたいして適用して、現実的にも具体化していることによつて、四四年の『経・哲手稿』は、その「疎外された労働」なる体系的断片を中核とした、その全体としての思想内容は、すでに、当時の色々の社会主義をアウフ・ヘーベンした独自の社会主義を、打ち出していたことになっている、ということができるわけであります。

このようにして、その前年の十月からパリに移ってから、イギリス、フランスの古典派の経済学の主要な諸文献を精神的に読破してゆく過程で、同時に、ヘーゲル哲学の唯物論化ということを常に念頭から離すことのできなかつたところの、当時のマルクスとしては、この『経・哲手稿』において、たんに、マルクス主義の成立のために不可欠な二つの思想的源泉を、同時にアウフ・ヘーベンして、マルクス主義の理論面を明確にしているだけではないのであつて、また同時に、当時の色々な空想的な社会主義の立場を超えて、やがては科学的なものに発展してゆくところの、マルクス独自の社会主義を新たに確立していたのであるわけであります。しかも、このマルクス独自の社会主義の確立というこのために、い

資本論における方法と世界観（中・その三）（梯）

ま申しましたことですが、ヘーゲルの弁証法を、その具体的な意味において理解したうえで、これを唯物化すべく批判的に継承したということが、決定的な役割を演じているということについて、ぼくたちは注意しておかねばならないと思うのですが、このことを、この『経・哲手稿』のなかに収録されてあるところの「ヘーゲル弁証法ならびに哲学一般の批判」という哲学的断片が、如実に物語っているわけであります。

この哲学的断片は、ヘーゲルの弁証法を経済的事実に適用するまえに、ヘーゲルの哲学そのものを唯物論化するように、その批判的継承を心がけて執筆したものであります。とにかく、このようなマルクス独自の理論的な歩み方によつて、プロレタリアートの主体的な役割についての正しい認識を獲得していつて、そして、マルクス主義なるものを、その理論面においてと同時に、実践面——厳密には、実践のための理論としての社会主義の面——においても、はじめて打ち出した、というようなことができるかと存じます。

それにしても、マルクスがパリに移住して、このようにマルクス主義者になるということ、すなわち、その『ライン新聞』時代の「徹底したヒューマニスト」から社会主義者に転

化したということ、このことのためには、三源泉についての理論的な研究が必要であった、ということは勿論のことですが、このような研究過程において、この研究を社会主義の方向に刺戟してゆけるような環境に、マルクス自身が、自分の生活する場所を決めていた、ということも併せて考える必要が、ぼくたちにあると思うのです。いいかえますと、マルクスは、ボンに移住して、自分の祖国であるドイツよりは遙かに意識水準の高い、フランスの社会運動家や労働者たちに接近していった、その活動状況を身近かに見聞して、労働者階級のとるべき社会運動が如何にあるべきかについて直接的に感得するところがあつたはずだ、ということでもあります。そのかぎりでは、後進国の祖国において、四四年六月に起つたシュレージエン地方の織物工の蜂起事件にたいして、正しい受けとめ方をすることも、できたのでないか、というようにも推定できます。

シュレージエンは、ドイツの東部にあつて、依然として封建的体制が根強く支配していた地方の一つであります。したがって、この蜂起は、問屋制家内工業としての前近代的搾取にたいして、もはや我慢しきれなくなつた織物工たちの絶望

的な反抗といつた性格のものであつたわけで、そして、当然ながら軍隊の出勤によつて鎮圧されてしまふという運命を、まぬがれることのできないものであつたわけであります。このシュレージエンの暴動に続いて、ポヘミアにも暴動が波及するのでありますが、エンゲルスは、この年の末にイギリスの一新聞に寄稿した「ドイツにおける共産主義の急速な進展」という文章において、これらの続発した暴動が、後進国ドイツの社会運動を、おおいに励まし鼓舞することになつてゐる、というように述べております。また、後年（一五一年）になつても、その『ドイツにおける革命と反革命』という論文でも、ドイツにおける「労働者階級の活発な運動のために、その幕を切つておとしたもの」というように評価してゐるのであります。そのようなものとしては、すなわち、封建的な圧力のもとにある絶望的な、一地方的な偶発的に見える蜂起であつたシュレージエンの暴動が、近代的な労働者の階級的自覚にまで発展するための端緒になつてゐるものとしては、当時のドイツの新興ブルジョア階級にたいしても、強い衝撃をあたえないわけにはゆかなかつたのであります。ところで、マルクスが、このシュレージエンの暴動事件を、どのように受け

とめたか、と申しますと、この事件の勃発後に間もなく一文を執筆して、その年の八月に、雑誌『フォールヴェルツ（『前進』）』に連載されることになっております。

この論文の標題は「プロイセン国王と社会改革」というのですが、そこでのシュレージエン蜂起について論述した主張内容は、まず、『独仏年誌』の共同発行者として同僚であるルীগが、この事件を皮想的にしか把んでいないことを指摘しながら、この蜂起という部分的反抗の形態をとってはいるにしても、この事件は、私有財産制度にたいするプロレタリアートの敵対関係を、明確に意識した行動である、というように理解すべきであると主張しているのであります。また、このように理解しうるかぎりでは、この一地方的な部分的反抗といえども、全人間的な解放を目ざす社会革命の性格をすでに持っている、というように高く評価することになるわけです。このような評価は、普遍人間的立場への自己解放ということを主張した「ユダヤ人問題について」という論文に初まって、それに続く「ヘーゲル哲学批判、序説」において、より明確になっていくところの、マルクスの「徹底したヒューマニズム」の立場から、当然ながら期待されるどころ

資本論における方法と世界観（中・その三）（梯）

のものであります。すなわち、この「序説」では、資本主義社会において喪失している人間の本質を取りもどすという使命の担手であるプロレタリアートによるところの、その社会革命のなかでのみ、すべてのドイツ人を人間的に解放することが可能である、と主張したのであります。シュレージエンの織物工たちは、いうまでもなく無産者でありプロレタリアであります。しかし、蜂起という行動、すなわち、一つの暴力は、プロレタリア階級の全面的な反抗ではなくて、一地方に偶発した部分的な反抗にすぎません。にもかかわらず、この部分的反抗としての暴力行為のなかにも、普遍人間的な精神なるものが、潜んでいるかぎりでは、依然として、それは全面的な意味をもっているし、ドイツにおけるプロレタリア革命の先駆としての役割を果している、というように、マルクスは解釈してゆくののであります。このようにして、さきの「序説」において一般的に述べたところの、プロレタリアによる社会主義革命なる思想を、後進国ドイツの反封建的な蜂起という眼前の事実のなかにおいて、より特殊化し具体化したものに発展せしめていった、というわけであります。

この論文で、マルクスは、政治的共同体とは区別されねば

ならないところの別の、より広汎な、しかも無限の内容をもっている共同体のことについて、述べておるのであります。

この別の共同体とは、人間の生活共同体、人間の本質であるすべての肉体的および精神的な生活そのものである真の共同体のことなのであります。そして、この人間の普通の生活そのものの仕方こそは、人間が公民たるかぎりでも組みこまれているだけの政治的生活よりも、無限である、と主張しているのであります。産業上の蜂起ということは、労働者たちが、こ

の真の人間の共同体から切りはなされ孤立させられて自己疎外の状態におかれている、ということから勃発するのであるから、この無限性にある人間的共同体を取りもどそうとする運動が、たとえ暴動であるといえども、そのなかに普遍的精神が潜在しているはずである。これにたいして、政治的蜂起なるものは、どんな普遍的な、立派な形態を整えたとしても、そこには何らかの偏狭な精神を隠しているものだ、というようにマルクスは分析しているのであります。ここでいう政治的蜂起なるものも、たとえば、ブルジョワ民主主義的革命における政治的暴動を指しているとするならば、この政治革命が利己的なブルジョアジーを解放しただけにとどまって、普

遍的な人間を私有財産制度から解放するという社会革命にまで徹底していない、そのかぎりでも、そこには偏狭な精神が隠されているわけで、それに比べれば、シュレージエンの産業的蜂起は、真の人間的共同体へ復帰しようとする衝動として、いっそう普遍的な精神をたたえており、その歴史的意思是無限である、という思想を、マルクスは、この論文で展開したことになります。

ところで、このように社会革命を政治革命から区別すべきだという主張は、すでに「ユダヤ人問題について」のなかでも述べられていたところのものであったわけでありました。しかも、この社会革命を必然的なものにするためには、プロレタリアートが、すなわち、個々の労働者が、人間的な本質としての生活共同体から切り離されて孤立化されている、いいかえれば、疎外されている、という事実が前提になっていなければならぬ、ということについても、すでに「ユダヤ人問題について」および「ヘーゲル法哲学批判序説」において、明確に述べられていたところでありました。ただ、雑誌『前進』に寄稿されたところの、この論文においては、ぼくたちが注目しておかなければならないことは、この労働者の人間的自

己疎外という状態が、どのようにして生じてくるものであるか、ということについてであって、それは、労働者自身の労働によって生じる、というように述べていることなのであります。プロレタリアートの人間的疎外の原因を、このように明確にした論述は、いま申しましたところの、すなわち『独仏年誌』に発表された二つの論文では、まだ見ることでできなかったところのものであります。そして、いま、この論文で、はじめて、この明確な論述を見るということは、この論述が如何に簡素なものであっても、そのように明確に述べられているということは、この論文の執筆のまえに、別に、このことについて突っ込んだ研究をやっていた、ということの意味しております。そして、この研究が、四四年の四月から八月にかけての一連の草稿、すなわち『経済学および哲学についての草稿』であることは、いうまでもないことでしよう。とくに、そのなかの「疎外された労働」と見出しのつけられている断片において、労働者にとって労働ということは、本質的な人間活動であって、この自分自身の本質的な活動によって、労働者は、疎外された状態におちいつている、ということ、マルクスは、いまだ思弁的な立場であるにしても、

資本論における方法と世界観(中・その三)(一)様

するどく分析しだしていることについては、さきほどから、申しあげてきたとおりであります。このような鋭く掘り下げられた研究によって、当時のマルクスとしても、はじめて、労働者の人間疎外なるものは、その自分自身の本質的活動としての労働によって疎外されるのですから、厳密な意味で、自己疎外といふべきである、というように、言えることになったわけなのであります。そして、この個々の労働者の「疎外された労働」の集積が私有財産であるというように解明されているのですが、当時の一般の経済学者が、当然の前提として、すなわち、外から過去から与えられていたものとして、不問にしていたところの私有財産制度なるものについて、その本質が何であるかの認識のために、マルクスは、史上で始めて、それについての解明をラディカルに、すなわち、その根底から、やってのけているわけでありませう。ヘーゲルの用語どおりに、それについての概念的把握を成就したわけでもあります。こうした論理的な研究の成果としての「疎外された労働」という草稿の断片が、すでに執筆されていた時、まだ執筆されていなくても、念頭に構想として纏っていた時に、おそらくは、この「前進」への寄稿論文「プロセイン国

王と社会革命」が、執筆されたのではないかと考えることは、きわめて自然なことであるとせねばならないでしょう。そうしますと、この寄稿論文は、『独仏年誌』の二論文から『経・哲手稿』への思想的成長を、——すくなくともその内容になつているところの、当時のマルクスの「経済学および哲学に関する一連の手稿」の全体が、今世紀まで遺稿として埋れていたかぎりのものとしては——マルクスのこの思想的成長を当時の思想界に示す唯一の文献として、貴重なものであった、というふうを考える必要が、ぼくたちにあるとせねばなりません。

それだけでなく、この思想的な成長は、たんなる連続的な成長ではなく、そこに一つの飛躍を成しとげている成長であった、ということにも、ぼくたちは注目しておかなければならないのであります。このことは、『経・哲手稿』のなかの「疎外された労働」という断片を、ぼくたちが分析的に吟味して見ることで、十分に理解できるところであります。

さきほども申しましたように、この『手稿』としての一連の諸断片をノートとして書き記すにいたったバリ時代において、マルクスは、イギリス、フランスの古典学派的経済学の主要

文献を読み漁ることに没頭していたのであります。そのかぎり、スミス以来の経済学において、諸国民の富が成り立つための唯一の原因は、重農主義のケネーのいうように特殊な農業労働でなくて、どんな形態の労働でもよいから国民大衆が勤勉に各自の労働に従事するところに横たわっているのだ、すなわち、このような労働一般が、諸国において、それらの国富の原因になっているのだ、という因果関係が確立されていたのであります。ところで、イギリスの古典学派的理論的發展として、スミスからリカルドに移つてゆくばあいに、スミスが「国民の富」といったものが、実は、資本家的な富であり資本制的な私有財産制度のことである、ということが、現実に誰の眼にもハッキリしてくるようになります。そして同時に、この資本家たちの私有財産の全体が、動かしがたいものとして制度的に保証されているかぎりでは、資本家に備わって労働している労働者にとっては、およそ自分たちに縁のない疎遠な事柄であるとして諦めるほかにないにしても、しかし、それと同時に、資本家的富の蓄積に反比例して自分たち労働者階級の窮乏化してゆくという事実は、すこしでも考えれば、個々の労働者といえども、直ぐ気づくことになつて

いた、というわけでありませう。そして、このような資本制社会における労働者が資本家的私有財産から疎外されている状態を、ただ現実的に把握したのにとどまったところの社会主義、いいかえますと、労働者階級に属する大衆の疎外状態の原因が私有財産制度にあるのだから、この資本制的私有財産制度を打倒しなければならない、というのにとどまったところの、当時の社会主義の思想が、それぞれの空想的な政策として、十八世紀の末から十九世紀にかけて、つきからつきへと打ち出されておったわけでありませう。これにたいしてマルクスの新たに打ち出した社会主義的思想なるものは、さきほど申しましたところの『独仏年誌』の二論文において、政治的革命から区別した社会的革命の立場での人間解放という「徹底したヒューマニズム」の思想そのものであつて、このヒューマニズムの思想が、さらに徹底されてゆくかぎりでは、空想的な社会主義の思想と同じように、目前に与えられている事実としての資本制的私有財産制度から、労働者階級に属するすべての人間を、普遍的人間にまで解放しなければならぬ、という思想にまで、具体化されてゆくのが当然のことである、と考えられるわけでありませう。それにしても、この

資本論における方法と世界観（中・その三）（梯）

ばあいには、マルクスとしては、労働者は、その資本制的な疎外状態から、どのようにして解放してゆけるのか、この解放が第三者による解放ではなくて、労働者自身による自己解放でなければならぬとしても、そのための客観的保証なるものは何であるか、ということに問題を感得して、この問題を解明しようと努力したはずであります。そして、この努力こそが、マルクスの思想を、『独仏年誌』の二論文における思想内容から『経・哲手稿』における思想内容へと、飛躍的に成長せしめるための、その重要なモメントとなつてゐるわけでありませう。

そこで、この努力というのは何であつたか、と申しませうと、第一に、ただいま申しましたところの、古典経済学についての研究に没頭するという努力のことであり、第二には、フォイエルバッハの感性的人間の立場を媒介にしてヘーゲルの弁証法を唯物論的に改作する、という哲学的研究への努力のことなのであります。この第二番目の哲学的努力において、自己解放ということの論理構造が厳密な正確性のあるものとして打ち出されるのであり、そして、第一番目の経済学の研究によつて、この自己解放という主体的な実践が、科学的法則

の必然性において客観的に保証されているということ、マルクスは、はじめて認識することができた、ということになるわけであります。ここで科学的法則と申しますものは、ただいま申しましたところのミスにおける、国富と労働一般とのあいだの因果関係のことであります。国富なり資本家的富なりとしての私有財産制度が労働者階級の労働一般を原因とした、その結果として成立する、という科学的な因果関係の事実認識を、そのまま、マルクスは継承するのであります。

しかし、このばあいに、この原因としての労働一般が、資本家に売られたかぎりの商品としては、資本家の私的所有になっているのであるから、労働者にとっては疎遠なものになっている。資本家に商品として売り渡してしまった色々の労働の一定量が、資本家的富の全体を生み出す原因になっている、という経済的事実にも鋭く注目しているわけであります。そういう意味で、労働者は資本制社会においては「商品人間」になっている、とマルクスは言うわけであります。人間としては飽くまで人格者でなければならぬところの労働者は、物として一般の商品と同じように「人間商品」として存在している。このような本来の人間性を喪失した状態は、まさ

しく疎外された状態にあるわけですが、この疎外状態も、労働者が自分の労働力を商品として資本家に売り渡すという、自分自身の行為によって生ずるかぎりでは、いいかえれば、自分の人格そのものを、たんなる物としての商品として疎外するとう、自分自身の行為によって生ずるかぎりでは、労働者の客観的な疎外された状態というものは、この主体的な自己疎外の結果的な所産なのであって、むしろ自己疎外の状態というべきなのであります。

ところで、マルクスが、このように分析的思惟を徹底させることによって、この対象的な事実認識に到達したのは、さきに申しました第一番目の努力としての古典派経済学についての研究の過程からの成果なのであります。つぎに、この自己疎外の状態から、どのようにして自己解放することができるのか、という問題を説明することから、続いて、賃労働者自身の人間観を、問題にしているのであります。そのうえで、マルクスとしては、労働者の自己疎外の状態を、たんに労働市場における「人間商品」として流通過程にだけに認めることにとどめないで、さらに、生産過程の労働行為そのものにも掘りさげて、その反省的な認識を主体的に深める、とい

うことになっているのであります。そして、この深化していった努力の成果が、「疎外された労働」という断片になっているわけなのであります。ところで、この主体的な反省的思惟を深化せしめるにいたった努力こそは、さきほどの第二のヘーゲル弁証法の唯物論化への努力なのであります。そして、この哲学的努力の成果として執筆されたものが、いうまでもなく『経・哲手稿』の第三ノートの最後に配置されているところの「ヘーゲル弁証法ならびに哲学一般の批判」と名づけられている断片であるわけであります。

この哲学的な断片で、マルクスは、生産過程において労働している人間としての賃労働者を、その論理的な構造が、どのようなものになっているかということ、理解してゆこうという立場から、まず、ヘーゲル哲学一般の観念論的性格を批判することになります。このことは、哲学する人間が、ヘーゲルでは、どのように考えられていたか、ということの問題にするわけであります。そうしますと、ヘーゲルでは、精神だけが人間の本質であって、ぼくたち現実の人間が普通に体験しているところの、感覚とか欲望とかいった日常的な意識は、非本質的なものである、と考えられております。その

資本論における方法と世界観（中・その三）（続）

かぎり、人間のこの本質的活動というものは、純粹思惟の論理的な自己展開ということになり、この論理的な自己展開にしたがった自己意識の活動だけでしかない、ということになっております。このような観念論的な人間観を排斥して、感性的意識こそが人間の本質であって、そして、この意識によって感覚される外的な感性的対象と同じように、人間も、自然的な感性的存在でなければならぬ、というように、人間の本質について逆転させた考え方を打ち出したのが、フォイエルバッハであったことは、皆さんも、ご承知のとおりであります。ヘーゲルが人間の本質とした精神とは、絶対精神すなわち神のことなのですから、人間の意識の外の物質的自然というものは、全智全能の神が創造した天地のことです。この天地創造という神の仕事を、ヘーゲルは、絶対精神が自分自身の力で自分の外に自分自身を対象化して外在的なものにする運動だというように、論理学的に表現しているだけのことなであります。それにしてもこのばあい、外在化された精神なるものは、もはや精神ではなくて物質的自然という姿となっている。精神とは全く疎遠なものに、それは転化してしまっている。すなわち、絶対精神は、自分自身の

七五（七五）

対象化活動によって自分自身を疎外して外在化せしめている。しかし、この自己疎外的な自己対象化によって物質的自然の状態に外在化せしめていても、絶対精神は、その絶対的な威力でもって、本来の自分の姿を取りもどさねばならない。自己回復しなければならぬ。この自己回復の活動は、人間の相対的精神をつうじて実現されるのであって、この自己回復の使命をもった人間意識の、一步一步と神の立場へ近づいてゆくという遍歴の過程を、すなわち、人間意識の経験の複雑化してゆく過程を、その最も単純な形態から上向せしめてゆくというように、体系的に叙述したものが、ヘーゲルの『精神現象学』という本なのであります。そのかぎりでは、この『精神現象学』の叙述は、ほくたち人間の普通の感覚や欲望という意識の経験から出発していることは事実なのですが、この意識の経験が、次から次へと、より複雑なものに高度化されてゆく、その方向は、絶対精神の非感性的な、すなわち純粋な思惟の立場に近づいてゆくべきものである、というように定められておるのであります。そういうわけですから、このような人間意識の経験の遍歴の過程は、感覚や欲望の対象になっっている物質的自然から遠ざかってゆくものとして、外界

の感性的対象を意識する経験は、ぜんじ捨て去られていって、内的な自分自身を意識する、すなわち、非感性的な自分だけを自己意識するところの、ただ思惟の世界における経験の発展という姿だけのもとして、論理的に進められてゆくほかない、ということになるのであります。

ほくたち人間に、だれでも自己意識の経験があり、いや、自分自身の本質的なものが、はたして何であるかということをもいつも反省してゆくという自己意識なるものは、ぜひとも、やらねばならないことなのですが、ヘーゲルの説いている自己意識というのは、感性的な意識の対象としての外的自然から自分の意識を切りはなしていつて、ただ非感性的な思惟の世界のなかに閉じこもって、そして神の立場に接近してゆくだけのものではない、というところに問題があるわけなのであります。そして、このように、人間の自己意識を神の立場に近づけるための純粹思惟の論理が、思弁的であるものとして、一般に批判されているわけですが、ヘーゲル自身としては、人間の思惟作用なるものは、このようないみでの思弁的であることによって、はじめて真に論理的である、というように考えて、そして、自分自身の哲学体系を打ち立てたの

であります。そのいみで、マルクスとしても、フォイエルバッハの立場に立つことによって、こういったヘーゲルの自己意識を、および、この自己意識をつらぬく論理の思弁的性格を、観念論的なものとして、斥けることができたのであります。

それにしても、このような観念論的なヘーゲル哲学の全体系を構築せしめることになっているところの、ただいま申したような、絶対精神の自己疎外的対象化とその疎外状態からの自己回復との二つの活動が必然的に結合されている論理は、いかえれば、最初の自己否定としての思惟活動を、もう一度、否定して、その出発点としての、直接的にしか、いいかえまずと即自的(『アンジッヒ』)にしか確實でないものを、媒介的にも向自的(『フュール・ジッヒ』)にも確實なものであるというように、論証していった、はじめて絶対に確實なものが具体的(『アン・ウント・フュール・ジッヒ』)に打ちたてられることができるのだ、という思惟の運動の論理、要するに、否定の否定によって絶対の肯定が獲得されるのだという、理性の段階として展開されている思弁的論理、この弁証法的論理を、マルクスとしては、ヘーゲル哲学に固有の遺

資本論における方法と世界観(中・その三)(梯)

産として高く評価して、それを批判的に継承するのであります。いいかえまずと、ヘーゲルの思弁的性格を棄てて、弁証法的な思惟運動を、ぼくたち普通の人間が思惟するばあいの思惟法則として継承しようとしたのであります。

ところが、フォイエルバッハは、マルクスとは違って、ヘーゲルが絶対に肯定的であると主張するための、この否定の否定という論理を斥けてしまったのであります。その理由となったものは、感性的な人間の直接的な経験にこそ絶対に確實なものがある、という主張を対置して、そして『キリスト教の本質』とか『将来哲学の根本問題』という著述まで出していることに拠ったわけであります。そのばあい、このように現実の感性的人間が、ただ自分自身の立場に踏みとどまり、自分自身の直接性だけに基礎を置いている肯定的なものというものは、積極的に、感性的に確實なものでなければならぬと規定して、そこから哲学を出発せしめようとしたわけであります。このようなフォイエルバッハのヘーゲル哲学にたいする批判は、一方では、ヘーゲル哲学なるものは、宗教を思想のうちに持ちこんだだけのものであって、そのかぎりでは、思弁的思惟によって論証された宗教にすぎない、というよう

に、ヘーゲル哲学の観念論的な性格を、鋭く暴き出したことになるわけでありませう。それと同時に、フォイエルバッハによるこのような批判における功績は、他方では、たんに現実の人間を自然的存在と見るだけでなく、この感性的人間どうしの社会関係をも認めている点で、「真の唯物論と実在的科學とを基礎づける」ことになっているのであります。

このような二重の意味において非常に傑出した立場を新たに打ち出したことになっている、というようにフォイエルバッハの功績を高く評価したのは、いうまでもなくマルクスなのであります。そしてマルクスは、このような評価のうえにたつて「ヘーゲル弁証法ならびに哲学一般の批判」という断片が書きはじめられているのであります。それにしても、マルクスとしては、フォイエルバッハが現実の人間の感性的実

体を強調した点に共鳴しながらも、この感性的人間が主体的に色々な活動をしている事実への分析が欠けている点、いかえれば、感性を主体的に捕えていないという点を指摘して、そのかぎりでは、人間社会の歴史的發展としての、その運動の論理がどういう構造にあるのか、ということを解明することとは出来ない、というように批判します。そして、この現実

の歴史的發展という運動が、どのような論理によって規定されているか、という問題を意識していたかぎりでは、当然ながらマルクスとしては、ヘーゲルの弁証法を、弁証法的思惟の自己展開の論理を、たとえ、それが観念論的な自己意識としての思弁的論理にとどまっていたとしても、この論理を批判的に継承しないわけには、ゆかなかつたというわけでありませう。このようにしてマルクスは、ヘーゲルの否定の否定という弁証法を、フォイエルバッハの感性的な実在世界にまで引きおろして、それを唯物論的に具体化する、という哲学的操作を、『手稿』のなかの、ただいま申しましたところの哲学的断片を執筆するさいに、努力してやってのけた、ということになります。

このばあいには、マルクスの念頭に重くのしかかっていたものは、現実の歴史的运动を推進せしめるためのものは、ただ普通の人間の色々な主体的活動を一般的に問題にすることでなく、この人間一般の主体的活動を本質的に代表し、それを規定するところの特殊な人間、すなわち、資本制社会における生産過程で労働している特殊な人間の、その主体的活動を、まず第一に問題にしなければならん、ということであ

ったのであります。そして、この特殊な人間としての労働者の生産的労働という主体的活動が、現実の歴史的運動のなかで果している役割を、論理的に説明せねばならぬという課題が、当時のマルクスの念頭に、重くのしかかっていたはずであつたわけでありませう。さきにも申しましたように、当時のマルクスとしては、賃労働者のことを、「人間商品」または「商品人間」と、呼んでおります。だからといって、たんに労働市場における労働力の売買の行為という主体的活動だけしか、問題にしなかつたのではありませぬ。そのばあいの「自己意識的な商品人間」というのを、さらに「自己意識的にして自己活動的な商品人間」とも呼んでゆくように、論述が進められているのであります。ここで言われている「自己意識的」というのは、ヘーゲルの女神へ接近してゆく自己意識ではなくて、どこまでも感性的人間に踏みとどまつたところのフォイエルバッハ的な、現実的に感性的な人間が、たれでも普通に経験している自己意識と同じものであることは、いま申しあげたところで疑問の余地のないはずでしょう。また「自己活動的」というのも、流通過程における労働力の売買という労働市場での主体的活動だけを指すのではなく、そ

れよりも、むしろ「商品人間」が、生産過程に入つていって労働するという生命活動そのものを意味せしめていたということ、このことに、とくに皆さんは注意して貰わねばならぬのであります。事実として、この哲学的断片において、マルクスが問題の焦点にしほつたことは、生産過程において労働する人間としての労働者の生命活動のことになつてゐるのであります。そして、この労働という生命活動を、労働者自身の主体的な自己活動として捕え、そして、この「労働人間」の主体的な「自己活動」にたいして、ヘーゲルの否定の否定の弁証法を適用することにあつたのであります。そこで、この弁証法における第一の否定としての自己疎外的対象化ということとは、ヘーゲルのいう絶対精神の自己対象化というのと違って、人間の生命力の対象化という意味のものに転化されているのであります。労働することによって、労働者は、ただ人間としての生命力を消費するだけのものではないのであつて、しかも、何ものをも自分のものとして所有することができないのであります。このような人間の生命力の喪失した自己疎外的状態から、本来の人間種属すなわち人類を歴史的に発展せしめる普遍的生命力を取りもどす、す

なわち自己回復する、いや、しなければならぬということ
が、否定の否定という弁証法における、その第二の否定的活
動として、論理的に要請されている、ということ強調した
のが、もう一つの断片としての「疎外された労働」なのであ
ります。労働者の自己疎外ということ、ただ労働力の商品
化として理解している経済学者が現在の日本にも多いのです
が、これは、マルクスのいうところの「商品人間」の自己疎
外だけを取りあげたものとして、現実的貧労働者の自己疎外
ということの、ただ、その一面だけしか見ていないところの
間違つた理解の仕方、しているものと言わねばなりません。

このように、ヘーゲルの否定の否定という弁証法は、マル
クスにとっては、労働という人間の活動の論理として捕えな
おすことよって、はじめて、その本来の姿を、すなわち、
その弁証法としての真実の意味を發揮することになる、と考
えたのであつたわけです。そう考えたかぎりで、マル
クスは、ヘーゲルが哲学体系を樹立したという、その哲学的
行為を「抽象的に精神的である労働」をやつた、そのかぎり
で、また、労働の固有の論理としての否定の否定の弁証法を、

観念論の立場で思想的に予見していた、というようにヘーゲ
ルを評価しているのであります。一般に誤つて解説されてい
るように、ヘーゲルは、現実の生産過程の労働者の労働の特
別に取りだして、それを理論的に解明していたわけでは決し
てないのであります。たとえば『法の哲学』の「市民社会」
の章のところ、古典経済学の労働の概念を取りいれておる
ことは事実であります、そのばあいには、これらの経済学
者たちと同じように、ただ実証主義的にしか、労働者の生産
活動を捕えておりません。いいかえますと、労働者の生産的
活動そのものが弁証法の論理構造にしたがつて、という
ような認識は、ヘーゲルには、なかつたのであります。ただ
『精神現象学』の「主人と奴隷との関連」のところ、自立
的な自己意識を持たない奴隷が、労働することによって、自
立的に自己意識的な主人にたいする服従の関係を、止揚する
という自己意識を持つにいたるといふ可能性をもつ、という
論理を展開していたことは、さきほども申しましたとおりで
あります、そのばあいでも、この可能性を現実化する方向
に、その叙述を展開したわけでは決してないのであります。
むしろ逆に、ヘーゲルとしては、自己意識なるものの発展を、

ギリシャの自由市民の思想の世界へとという方向に、観念論的に、その叙述を進めていっているのであります。

哲学的断片としての「ヘーゲル弁証法および哲学一般」のなかで、マルクスが「ヘーゲルは労働を自己産出的行為として描えていた」というように述べていたことは事実でありますが、ここで「労働」といっているのは、いまいがた申しましたように「精神的労働」としてのヘーゲルの哲学的行為のことではなかった、ということに注意しなければなりません。ヘーゲルの哲学的行為としての自己産出性を、いいかえれば、自己対象化的活動を、したがって、この自己疎外的な自己対象化活動が、必然的に、その疎外状態から自己回復せねばならない、という否定の否定という弁証法を、ヘーゲル哲学の全体系を築き上げたところの、この弁証法を、マルクスは、現実の資本制の生産過程における労働者の労働という生命活動のなかに、具体化してゆくことに成功した後になって、やはりヘーゲルも「精神的」労働というかぎりでは、労働ということの弁証法的な論理を、無自覚的にあるにしても、すでに展開しておいたのだ、というように反省的に評価したのであります。このように解釈するのが正

資本論における方法と世界観（中・その三）（梯）

しいのではないか、というのが、ぼく自身の従来の考え方なんです。この解釈が正しいか否かということは、とにかくとして、ヘーゲル哲学の全体系を貫いている方法論としての弁証法なるものを、マルクスは、現実の生産過程における労働者の生命的活動のなかに適用して、この労働という生命的活動そのものの論理構造を、究明してゆこうとしたのであります。このことには問題は、ないはずでしょう。

このばあいには、そのようなマルクスの意図を実現させてゆくための第一歩として、マルクス自身としては、ヘーゲルの弁証法を、フォイエルバッハの批判したように、宗教を再興するにすぎない思弁的な論理として斥けるのではなくて、このフォイエルバッハの積極的に主張する感性的人間の世界において、ヘーゲルの弁証法と具体化して適用して見る、という仕事をせねばならなかったのであります。神学の立場において展開されたヘーゲル哲学一般の方法論としての弁証法を、唯物論化して見ようという努力を、まず、やらねばならなかったのであります。そして、この努力の成果が「ヘーゲル弁証法および哲学一般の批判」という断片的な一手稿であったわけでありまして、それから次の第二歩としては、この哲学的

八一（八一）

断片において唯物論化することのできた弁証法によって、すなわち否定の否定という論理によって、現実の地上で労働している人間としての労働者の活動を、その論理構造において理解する、という仕事に着手することになる。この第二步の努力の成果が「疎外された労働」という体系的な断片としての別の手稿となるわけでありませう。このように理解しなければならぬとすると、四四年の『経・哲手稿』における、これらの二つの断片は、マルクスの思想形成過程において、哲学から経済学へと移ってゆくところの、もう一つ細かな足どりを示しているものとして、切っても切れぬ関係にあるものとして、ぼくたちは理解しなければならぬ、ということになっていたのであります。

そこで、ぼくとしては、本日の講義では、この「疎外された労働」という『手稿』の断片において、どのような理論内容が展開されているか、ということに話しを進めてゆかねばならないことになるのですが、この話しは、ここでは、以上に申しあげただけのものにしておきたいと存じます。このことについては、ぼくの『経済哲学原理』という本のなかで、非常に詳細に述べたので、皆さんは、この本によって勉

強して頂きたいものと存じます。ただ、ここで申しあげておかねばならないと思うことは、さきに（『本節の冒頭のところで』）お話ししておいたところの、この四四年のマルクスの『経・哲手稿』の編集の仕方のことについてのことなのであります。いままで話しを続けてきたことによって、皆さんも、この『手稿』における哲学的な断片としての「ヘーゲルの弁証法および哲学一般の批判」は、その他の経済学のおよび社会主義的な諸断片にたいして、その不可欠な前提になるもの、マルクスの頭脳の中での思想成長のうえからみて、論理的順序において、どうしても前提的なものとして考えねばならぬ、というように、ご理解していただいたことと存じます。そのかぎりでは、いいかえますと、この哲学的な断片と、他の諸断片とは、とくに「疎外された労働」という経済学的断片とは、思想的に連続したものであるかぎりでは、この四四年の一連の手稿の全体は、機械的に切り離して編集しては、マルクスの意図に背くことになる、というように考えねばならないのであります。ところが、一九五三年に東独で刊行されたディーツ（Dietz）版の『マルクス・レーニン主義叢書』（=Bücherei des Marxismus-Leninismus）では、この哲学的断片と、

その他の経済学および社会主義的な諸断片とは、機械的に切りはなされて、二冊の本のなかに、別々に収録されているのであります。すなわち、その哲学的断片は、一九五三年に刊行された「神聖家族と、その他の哲学的な初期の論集」(= "Die heilige Familie und andere philosophische Frühschriften")のなかに、そして、経済学的な諸断片は、五五年になつて刊行された「経済学的小論集」(= "Kleine ökonomische Schriften")のなかに収録されている、という具合であります。しかし、このような編集の仕方の誤りは、その後に変更されることになりました。

それは、五六年に、ソビエトにおいて「マルクス・エンゲルス初期論集」が、ロシア語で刊行されたときであります。さきに申しました「メガ」は勿論、ドイツ語の原文なのですが、これが、マルクス・レーニン研究所の委嘱によつて、ロシア語に翻訳されておつたのですが、このロシア語版の『マル・エン全集』の補巻として出されたのが、いま申しました「マル・エン初期論集」なのであります。ここでは、四四年のマルクスの一連の手稿の全体が、一つの労作として、すなわち、アドラッキーの編集どおりに、その標題も「経・哲手

資本論における方法と世界観(中・その三)(極)

稿」として、収録されておるわけでありませぬ。このことが動機になつたのか、どうかは知りませんが、東独のドイツ版の『マルクス・エンゲルス全集』(= Marx Engels Werke)の刊行が、マルクスおよびエンゲルスの遺稿についての解説をより正確なものに改善して、行われるのであります。その「補巻、1」が六八年に出されて、そこでは、やはり「経・哲手稿」として纏めて収録されております。しかし、これらの二つの、ソビエトおよび東独の二つの刊行事業は、それぞれ意味の多いものでしょうが、ただ、なぜに「補巻」にしたか、その発行を最後に回わしたりしたのか、ということをや、

かんぐれば、なにか理解しがたいものを、ぼくとしては、感得しないわけにまいらないのであります。このことは別といたしまして、とにかく、日本では、戦後において、マルクスの一連の遺稿の全体が、どの全集においても、幾つかの単行本においても、「経済学および哲学に関する手稿」と標題されていることは、学界的な意識の水準の高いことを、ものがたっているのではないかと、ぼくとしては、思つておるのであります。しかし、こうした編集の問題は、本日の講義にとつては、その話しの本筋のことではなくて、ついでに申し添え

ただけのものにすぎません。

本日の講義にとつて、その本筋になるべき話しに戻してゆかねばなりません。ここ（この第七節のところ）では、このマルクスの四四年の『経・哲手稿』において、さきほど来、お話しをしまゐっておきましたところですが、すでに『独仏年誌』に公表した二論文において、ぜんじ徹底したものになつてゆくところの、青年マルクスのヒューマニズムの精神が、ようやく厳密な規定のもとに概念として打ち出されてくることになっております。すなわち、この『手稿』では、その「徹底した人間主義」の立場は、それが同時に「徹底した自然主義」の立場でもあることによつて、はじめて、いかなる観念論とも絶縁することができ、というようにマルクスは、その論述を進めているのであります。ここにいう「徹底した自然主義」なるものが、どのような思想内容であるか、ということの説明は、さきにも挙げてまいりました。拙著の『経済哲学原理』によつて、その理解を深めていただくことにして、ここでは省略させていただきます。ここでは、とにかく、そのように規定されている「徹底したヒューマニズム」の精神が、若き時代のマルクスに成長して、そして、

パリ時代に発表された二論文において、鮮明な形で展開される、というマルクスの思想上の成長という点に、この話しの焦点を合せておかねばならない、と思うのであります。すると、現在、ぼくたちが『経・哲手稿』として読んでいるところの、四四年の二月から八月までに執筆されていたマルクスの一連の遺稿において、そこに表現されている「徹底したヒューマニズム」なる言葉のもっている思想内容は、とくに「ヘーゲル法哲学批判序説」においても、すでに形成されていたのであった、というように連続的に、ぼくたちは考えねばならないことになる、ということ、いうまでもないこととなります。それだけでは、ないのであります。この四四年の二月から八月までに執筆した一連の「手稿」が、当時においても、原稿のままて発表できなかったにしても、この「手稿」に溢っている「徹底した人間主義」なる精神は、そのまま、同年の七月末に執筆して、八月に「フォルヴェルツ」に発表した論文——「 \wedge プロイセン国王と社会改革——「プロイセン人 \vee にたいする批判的評論」——において、シュレージェンの暴動を、一地方的な蜂起として受けとるのでなくて、そこに普遍的な人間解放の性格を認める、という「徹底した

ヒューマニズム」の精神として、溢出した、というように解釈することは、ぼくたちの当然、とるべき態度でなければならぬ、というわけであります。そして、このマルクスによって表明されたところの「徹底したヒューマニズム」にたいして、おそらくエンゲルスも共鳴したはずであろうことに疑いを持つことは、ぼくたちにも不可能であろうとするならば、同年の八月中の十日間の記念すべき二人のあいだの会見を、実現せしめたものも、兩人の理論的一致というだけでなくて、その根底には「徹底したヒューマニズム」の精神を共有していたことが横たわっていた、というようにも解釈せねばならぬことになるでしょう。そのかぎりでは、さらに、その後の兩人の協力によって発展せしめられてゆく、理論上だけでなく実践上での、マルクス主義の発展という過程においても、この「徹底したヒューマニズム」の精神が、その思想的なモメントとして、生き続けていくものと、理解しなければならぬことになるのであります。